

## 資料紹介

西沢利栄著『熱帯ブラジルフィールドノート——  
地球環境を考える——』経済協力出版会 1999  
年 239ページ

地理学者である著者は旅の名人である。優れた自然観察者であり、人とのコミュニケーションの達人でもある。写真の名手であり、名文家でもある。本書はそんな著者の20数年に及ぶ熱帯ブラジルでのフィールドノートのエッセンスである。しかし単なるフィールドノートではない。副題にあるように、フィールドにあつて著者は地球環境にも思いを馳せている。著者の旅は北東部内陸の半乾燥地セルトンから始まる。周期的に旱魃にみまわれブラジルで最も貧しい地域の気候、植生などについて語り、パン焼きの薪消費量から森林の消失面積を推計し、他方で過酷な自然条件のもとで意外に森林更新が速いなど興味深い事実を明らかにしている。これらの調査は持続可能な開発とは何かを知るうえで貴重である。

もう一つのアマゾンの旅では、熱帯雨林の種の多様性と生態系の微妙なバランスを語り、それを維持することの重要性を説き、保全のためさまざまな試みを紹介している。環境問題の理解と解決には正しい知識が不可欠である。本書は、ブラジルの二つの地域の生態、人々の暮らし、森の天然更新などについて、多くの知識を与えてくれる。

(小池洋一)

細川周平著『シネマ屋、ブラジルに行く——日系移民の郷愁とアイデンティティ——』新潮社  
1999年 230ページ

この本で使われる「シネマ屋」とは、日本からの

移民向けにブラジルの地方都市や集団地で上映された日本映画の解説者や、配給業者のことを指す。トーキー化とともに弁士の役割はなくなったが、ブラジルの巡回上映では、フィルムが切れたり機械が壊れることが普通であり、これを補う弁士の役割は1950年代までは続いた。

映画作品そのものではなく、それをアマゾン奥地の開拓村まで運んで上映した人々や、それらのシネマ屋を心待ちにした移民の立場からブラジルにおける日系移民の歴史が書かれている。特に興味深いのが、移民がどのような思いでブラジルの地で生活をしてきたかが、映画の興行を通してよく現れていることである。例えば、日本の大衆文化に対して、「日本の文化が低俗だと誤解されてはこまる」とか「外人に観せぬ条件とし……」のように、ブラジル人の目を意識して日本映画を批判したり、ブラジル人をガイジンとして捉えている。

戦後の「勝ち組」,「負け組」を巡る映画事情からも当時の移民社会がうかがわれる。ブラジルでは日本の空襲のように敗戦を身を持って体験する事実がなかったため、また、日本からの情報が乏しかったため、人々の願望であった戦勝が信じられた。その「勝ち組」が集まる上映会では、戦艦ミズーリ号での降伏受託調印式のニュース映像に、悲運の大將マッカーサーが降伏の署名をする、という解説が付けられ、各地で引っ張りだこになった。

日本映画の興行で移民がいかにして郷愁を癒したかを通して、ブラジルにおける日系移民社会の歴史が興味深く描かれている。

(清水達也)

## 資料紹介

清水 透編著『ラテンアメリカ——統合の圧力と拡散のエネルギー——』大月書店 1999年  
273ページ＋年表7ページ

本書は、現代のラテンアメリカの社会をどのようにとらえるかについて、各論者の問題意識を強く打ち出した論文集である。

冒頭の総論「ラテンアメリカとは何か」（清水透）は、この地域の歴史的概観を行ないつつ、そこで、単一の人種や出自の人々による社会統合の圧力に抗して、多様な人種、混血集団が主体になろうとする拡散のエネルギーが示されている、として、以下の各論の方向性を概括、予告する。「語りはじめた『人種』——ラテンアメリカ社会と人種概念」（鈴木茂）は、人種というカテゴリーが、社会的に操作されるものであることを明らかにした後、ラテンアメリカで、人種による差別は存在しないとされてきたのは、例えばメキシコ、ブラジルの場合、混血による「国民的アイデンティティ」を指向しようとした歴史的事情があることを指摘する。「排除と統合——近代ラテンアメリカ都市のエリートと民衆」（高橋正明）は、南米チリ首都サンティアゴの都市下層民、労働者に焦点を当て、19世紀初頭から20世紀初頭までの歴史的な変容を跡づけ、ラテンアメリカにおける都市下層、都市問題のより深い理解を得ようとする。「歴史的拘束の意味——観光・文学・映画の政治」（林みどり）は、アルゼンチンの国民的シンボルとされる「 gaucho（ガウチョ）」を歴史的、記号論的に分析、考察する。牧場における臨時労働者に対する蔑称であった「 gaucho（ガウチョ）」が、あるいは独立戦争の指導者によって「愛国的民衆」として用いられ、あるいは中

央政府への反乱軍として非難すべき「社会的騒擾者」として、あるいは同情すべき「犠牲者」として、あるいはペロニズムのシンボルとして、さらには公的な国民的伝統として認められるまでを、批判的に辿る。「グローバル化する経済とラテンアメリカ社会——新自由主義の光と陰」（谷洋之）は、ラテンアメリカで新自由主義的な政策がとられるようになった国際的、国内的な文脈を明らかにし、それがもたらしたマクロ経済の向上といったプラス面を認めながらも、貧困問題や分配の悪化、さらには競争至上主義的な価値観の浸透といった状況を指摘する。過去の経済政策全体を失敗とみなし、それを根こそぎ取り去ろうとする姿勢に反対し、生活水準の改善という本来の経済目的を唱えるのである。「世紀転換点のラテンアメリカ政治」（大串和雄）は、ラテンアメリカにおける1980年代の民主化以降、この地域に根づいたかに見える民主主義について、人権侵害の状況の分析を通じてその実状を描いた上で、それを支える政治文化（新自由主義の流行の一方で、オルターナティブの消失）を世界的な共通性の観点から詳論する。「開発のなかのアマゾン——発明される自然・否認される社会」（古谷嘉章）は、ブラジル政府によるアマゾン開発と森の人々（先住インディオとゴム採取等で生活するセンリゲイロ）との対立を扱う。著者は、後者の人々が、森林の中に生活し、社会をつくり、また森林を再生産させてきたという事実を強調しつつ、後者を代表するシコ・メンデスの運動を紹介し、共感を表明している。最後の「人の移動・国家・生活の論理——ラテンアメリカと日本をつなぐもの」（山脇千賀子）は、100年前の日本からペル

一への移民によって形成されてきた、第2次世界大戦前のペルー日系社会が、日本を理想とし、日本領事館の出先機関的役割を果たした中央日本人会を頂点としながら、日本的な権力構造を再生産していたことを指摘した後、今日、経済的な機会を求めてやってきた日系ペルー人が自分たちの祖先と似たような経験を経ながらも、国家の論理とは異なったエスニック組織を作っていく可能性を、国際的なネットワークの存在と結びつけつつ記述、論じている。

(米村明夫)

グスタボ・アンドラーデ、堀坂浩太郎編『変動するラテンアメリカ社会——「失われた10年」を再考する——』彩流社 1999年 282ページ

世界史上、1929年世界恐慌をはさむ両大戦間期が発展モデル・国際体制の転換点とされ、きわめて多くの研究がなされてきた。同様の意味においてラテンアメリカにとって80年代は、発展モデルとそれを取り囲む国際体制の転換点であったことに異論の余地はなく、今後とも研究対象とされる時代となっていくことが予想される。今回のラテンアメリカの場合でも、転換点は「失われた10年」という形、すなわち危機となって出現した。それから10年が経過して出版された本書は、ラテンアメリカ史上の転換点の歴史的意義に留意しつつその分析を行なった日本で最初の著作であるといえる。

本書は上智大学イベロアメリカ研究所が1980年代ラテンアメリカの社会的変動に注目した研究会の成果である。対象国はメキシコからチリまで中米諸国を含む7カ国・地域からなり、また取り扱った課題

もメキシコの間層の没落、コロンビアにおける殺人の問題、ペルーにおけるナショナルアイデンティティの問題、アルゼンチンの失業問題そしてチリにおける社会保障改革などきわめて幅広い。このようにラテンアメリカ主要国を網羅し、幅広い課題に取り組んだことにより、本書を通して80年代ラテンアメリカで起きた社会変動の概要をわれわれは知ることができる。

(宇佐見耕一)

小池洋一他編『図説ラテンアメリカ——開発の軌跡と展望——』日本評論社 1999年 146ページ

手元において重宝するラテンアメリカに関する参考書はいくつかあるが、この本も机の上に置いて必要な時に参照したり、ページを繰りながらラテンアメリカの最新のイメージを捉え直すのに非常に役立つような本である。

本書は開発をキーワードに、ラテンアメリカの自然、政治、社会、経済に関わるさまざまなテーマについての最新の状況を紹介した概説書である。特徴として二つあげられる。第1に取り上げるテーマの豊富さである。守備範囲は広いが、しかし目配りが効いている。ラテンアメリカを社会科学の視点から分析しようとする場合に登場するテーマのほとんどが網羅されている。それぞれのテーマについて、専門のラテンアメリカ研究者16名が分担して執筆しており、最新の研究蓄積をもとに、開発との関連に留意しながら、各テーマの最新の状況が簡潔に解説されている。第2の特徴は、統計図表を多用し視角に

訴える工夫がされている点である。主要図表は地域のほとんどの国を網羅し、必要な場合はラテンアメリカ以外の地域にも及んでいる。図表を眺めるだけで、ラテンアメリカ地域の構造、他の地域と比較した場合の特徴がイメージとして浮かんでくる。

ラテンアメリカ研究や開発研究の入門者には教科書としてうってつけと考えられるし、前述のようにラテンアメリカ研究者にとっても机上に一冊置いておく便利な本である。

(星野妙子)

Gabriel G. Casaburi, *Dynamic Agroindustrial Clusters : The Political Economy of Competitive Sectors in Argentina and Chile*, London, Macmillan Press, 1999, xiii + 234p.

シリコンバレーのコンピューター産業や北イタリアのアパレル産業など地域独自の産業の発展を、企業間の協力や官民協同、その産業に向けた政策などに焦点を当てて分析するクラスター論が注目を集めている。本書ではこの手法を応用して、ラテンアメリカの農業部門の発展を分析している。

対象としているのは、チリ・セントラルバレーの生鮮果物の生産と輸出、ならびにアルゼンチン・ラファエラ地区の酪農産業。セントラルバレーではブドウやリンゴをはじめとする果物の栽培が盛んで、北半球の生産地の端境期に生産され、冷蔵船で欧米市場に運ばれて大きなシェアを占めている。ラファエラ地区の酪農は、アルゼンチンのマクロ経済が不安定なため輸出市場ではそれほど成功していないが、国内平均と比べてかなり高い生産性を達成している。

チリでは、果物栽培に関する研究開発や輸送のためのインフラ整備、輸出相手国の検疫制度に合わせた品質管理、マーケティングなどで中央政府が重要な役割を占め、輸出産業としての成功に結びついた。経済自由化以降は民間への委譲がスムーズに進み、輸出業者から生産者へ情報が流れる体制を整えるなどして、競争力を維持している。しかし地方政府や地域社会の基盤は脆弱で、生産者や輸出業者の間の結びつきはそれほど強くない。

アルゼンチンでは、地域内の生産者の結びつきが強く、協同組合が結成され、製品の加工や流通などで大きな役割を担っている。また、生産者同士がサークルを形成して、お互いの生産技術や経営方法について話し合ったり、専門家から助言を受けたりして生産性の向上を達成した。しかし、中央政府の力は弱く、産業政策や研究開発といった面では有効な手を打つことができなかった。

ラテンアメリカの中では、チリ政府による輸出振興策の成功例が注目を集めているが、それだけが成功へつなげるわけではない。ラファエラ地方の例が示すように、それぞれの国や地域に合った方法でも産業が振興されることを示している点が興味深い。

(清水達也)